

Title	<知の先達たちに聞く(5) : 応地利明先生をお迎えして>質疑応答
Author(s)	
Citation	イスラーム世界研究 : Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies (2012), 5(1-2): 118-120
Issue Date	2012-02
URL	https://doi.org/10.14989/161190
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

バイアスがかかった文献だとされています。つまり実態は、異なっていたというのです。しかしこの議論は、重要な点を見落としています。それは、漢族・中国と比較すればあきらかです。

中国仏教では、なんども王仏論争がありました。王仏論争というのは、仏教徒にとって「王と仏のどちらが上であって、どちらに従うべきか」ということをめぐる論争です。もし仏を王より上位だとしたら、その途端に、皇帝から仏教に対して徹底的な弾圧がくわえられました。皇帝・天子は、なにもものからも超越した絶対的な神聖王だからです。仏が上にくるようなことは、あってはならないのです。

中国史では、王仏論争をもとにした仏教弾圧つまり「法難」が、何度もありました。そのなかで有名なのが、「三武一宗の法難」とよばれる4回の弾圧です。とりわけすさまじかったのは、「三武」の1人にあたる唐代の武宗による「会昌の法難」です。このとき在唐していた円仁は、命からがら逃げ回ったことを『入唐求法巡礼行記』に記しています。洛陽に行かれる機会があれば、ぜひ龍門石窟を見てください。無数ともいえる彫像のなかで、則天武后を写したとされる少数の彫像を除いて、残りのすべての彫像の顔が削られ、「会昌の法難」の際の弾圧の徹底ぶりを伝えています。

この状況を、ヒンドゥー・インドの場合とくらべて下さい。インドでは「バラモンが王より上だ」と書いたとしても、なんら問題となりません。しかし中国では、それは弾圧の対象です。先に引用したヒンドゥー經典の言説を、現実とは異なったバラモンのバイアスとして棄却するだけではすまないのです。ヒンドゥー・インドでは、バラモンがこのような言説を展開できることが重要なのです。いわばバラモンの側に、言論の自由があるのです。

もちろん漢族・中国では、弾圧の背後に、仏教を夷、厳密には西南夷の宗教として蔑視する傾向があったことも指摘しておかなくてはなりません。たとえば先述の「会昌の法難」では、ネストリウス派キリスト教にあたる景教、またゾロアスター教にあたる祆教などの西方起源つまり西戎の宗教も弾圧されました。

ついでに日本についてごく簡単にふれておきますと、日本では仏教は鎮護国家の宗教として導入されました。日本仏教では、当然、仏教は天皇に従うべきものであって、王仏論争とは無縁でした。だから中国とは異なって、寺院に寄進されたものが文化財として今日にも伝世されているのです。そして最大の仏教弾圧が、国家神道確立のために明治政府によってなされた廃仏毀釈でした。それが、日本近代の冒頭を飾るのです。

これをもって、終わりとします。

質疑応答

【質問】 政治学を専攻していますので、どうしても権力の問題を考えるのですが、今日の先生のお話の中で、王権の違いが民族の思考によって違っておっしゃられました。王権のあり方の違いはどのようなところから生まれてきたのでしょうか。

【応地先生】 起源が何かということですね。中国の場合は神聖王で、自らが神になるのですが、

その起源は、やはり秦の始皇帝にあると思います。秦の始皇帝によって、神聖王的な王権が強調されていくのだと思います。彼は、自らを「始めの皇帝」と名のつたのですが、その「皇帝」をいう帝号の由来について、司馬遷が『史記』で語っています。それによれば「皇」は、天地人の三才に由来する天皇・地皇・人皇の「皇」です。「帝」は、中国の伝説的な王である五帝の「帝」です。これを合わせて、彼は臣下の進言をしりぞけて「皇帝」を帝号としました。そして最初の「皇帝」ということから、「始」をつけたのです。ちなみに彼の子である後継者は、「二世皇帝」とよばれました。

このように始皇帝は、王権を確立すると同時に、皇帝権力をそれまでとは違った卓越したものとして確立したのです。彼が確立した卓越した王権は、神聖王的なものでした。それが、中国王権の基本となっていきます。

もう一つ大きな変革は、前漢の末から後漢の初め頃に出てきます。それまでの家産制国家的な血の紐帯から、皇帝に権力を集中していく方向が出てきます。皇帝が、自分の手足となる官僚的存在をつくっていくのです。これを突き詰めていったのが、科挙制の登場です。科挙制以前の南北朝時代には、九品官人法がありました。九品官人法の段階では、なお貴族を基盤として官僚的存在が選抜されていました。しかし科挙制の時代になると官僚網が見事にできていき、それによって皇帝権力つまり王権が一層確立していったという歴史があったと思います。

インドの場合、帝王表を見ても「王の中の王=大王」を意味するラージャ・ラージャという帝号は、古代にはなく、以後もあまりありません。西アジアでは、ペルシア語で同様の意味をもつシャー・ハン・シャーに似た帝号はいくらでも出てきますが、インドではクシャトリアは、ラージャ・ラージャとあまり名のらなかつたのでしょうか。それには、上位ヴァルナとしてのバラモンの存在があったのかもしれませんが。古代都市国家の十六大国の時代には、バラモン自身が王になった例はありますが、マウリヤ帝国の成立以後は基本的にはありません。そのことが、逆に、クシャトリアがラージャ・ラージャを名のりにくかつたのかもしれませんが。

ほぼ南アジア全体を統一した王朝はイスラーム王権によるもので、それに匹敵する統一王朝を樹立したヒンドゥー王朝はほとんどありません。マウリヤ朝くらいのもので、グプタ朝にしても、かなりローカルな存在です。ですから歴史的展開から考えても、中国は、先述したタイトな求心と遠心の力学をつかひながら、確立した皇帝権力を中心に帝国という「かたち」を一貫して維持してきたのです。その延長線上に、現在の中華人民共和国もあると思います。

これに対してインドは、その歴史的展開が示すように、統一よりも分立の時代が長いのです。分立を克服して統一王権による統一された帝国は、ムガル帝国あるいは大英帝国といった外来勢力によって樹立されたのです。それは、今日の話題の「超国民国家への道」で先述した「文化的統合力は強固ではなく、地域的に分立する傾向をもつ」という文化状況と対応する政治状況といえます。

この点は、東南アジアでいえば、インドネシアと似ているのではないのでしょうか。土屋健治さんの『カルティニの風景』をもとに話しますが、インドネシアはオランダ語を媒介にして、初めてオランダ領東インドの各地から集まった人々がたがいに会話することができました。1885年の最初のインド国民会議に全インドからボンベイに集まった人々は、英語を介して話し合えたというのと同様の状況だったといえます。この点でも、中国には漢字がありますから、話し言葉では通じなくても、文字・文章を介して互いに了解可能なのです。漢字という表意文字をもとに統合的な文化メカニズムをつくりあげていたのです。

つまりインドの王権の弱さは、ヴァルナ制だけでなく、文化的分立傾向とも相即しているので

す。また中国の王権の強さは、神聖王の王権思想にくわえて文化的統合力の強さと相即しているといえます。その相違を明確に示しているのが、両者が生みだした都城思想です。

【質問】 私はインドのガンディーなどに興味を持っています。ガンディーを行動に駆り立てたものは危機意識だと思っています。つまり、この世界——インドも含めて——近代文明によってどんどん悪くなっていくという意識です。その背景には、インドのカリ＝ユガのような世界が悪くなっていくという世界観があったのではないかとも思います。このようなものはインドに特有なのでしょうか。中国やイスラームではどうなのでしょう。そうした世界観あるいは歴史観についてお話を聞かせていただければと思います。

【応地先生】 歴史観ということでは、インドの場合、輪廻からの離脱を希求するというモークシャ（解脱）の観念があって、自身のライフ・スパンの中で時間を考えるという感覚があると思います。ですから、インドでは、自身を越えた時間あるいは歴史という感覚は乏しいのではないかという気がします。モークシャをもとめて自己の完成を希求するという「個」に徹する感覚があるのではないのでしょうか。それが、よく指摘されるインドにおける歴史感覚の弱さの背景でしょう。

もちろん、これには保存性の高い紙がなく、記録するということが困難であったことも関係しているでしょう。貝葉文書は主としてパルミラヤシを原料としていますが、せいぜい200年くらいしかもちませんよね。「知」が口承で伝承されてきたのには、秘匿すべき対象ということにくわえて、貝葉文書の短命性があったのではないかと思います。しかし記録がないことは歴史観と関係するでしょうが、やはり人生観が人間にとって大切であるという観念がより重視されたのでしょう。自分自身が輪廻を繰り返すか、ブラフマーのもとで永遠の生を享受するかは、善行を積んで自らを改変できるという考え方があって、その中に歴史というものを収斂させているのではないのでしょうか。この意味で言えば、ヒンドゥー教は、タイム・スパンの短い終末論的な側面があります。

キリスト教にしる、イスラームにしる、それらは、死後、神が再臨する時までじっと土の中に埋もれて待っているわけで、時間的スパンとしては大変に長いといえます。自分の人生の中でもものを考えるという点では、インドは、むしろ中国と似ているのかもしれませんが。もちろん中国は現世主義ですから、孔子は「まだ生きることも分からないのに、まして死んだあとの方が分かるか」（『論語』卷六先進第十一「曰未知生、焉知死」）と言っています。これは、中国人の本音だと思います。孔子は、死後については答えなかったわけです。

ちなみにガンディーについては、あなたの仰っているガンディーは、やはり「大文字」のガンディーです。いわば公式版のガンディーです。私は、彼は大変な権力論者と考えています。あれほどのすさまじい戦略を練りあげるのは、権力主義者でしかできません。彼にくらべれば、ネルーはお坊ちゃんです。「大文字」のガンディーは、聖者として語られます。その一面を、全面否定しません。彼の回すチャルカ（糸車）は単にスワーデージー（国産運動）のシンボルではなく、あれは、正に法（ダルマ）としてのチャルカです。そのことも計算に入れて、彼は糸車に仮託して法輪（ダルマ・チャクラ）を回したのだと思います。賢明な凄まじい戦略です。やはり「小文字」のガンディーは、非常に計算高いパニヤ（商人）の息子ではないのでしょうか。ですから、バラモンのパンディット（学者・学識者）の息子であるネルーとは違うのです。